



# やかただより

広川町  
全戸配布

第106号  
令和元年8月

## 「ごりょう語り部ジュニア」

広川町語り部サークルは、今年も町内5、6年生を対象にした「ごりょう語り部ジュニア」クラブを発足させました。この事業は、昨年始めたもので、一年間を通して「濱口梧陵」「津波防災」等を学習します。最後に、保護者など大人の人達の前で語り部発表会をするものです。この「語り部ジュニア」は、かなり高度な内容のテキストを使って勉強し、最後に仕上げの発表会をします。



前号では、関西大学と龍谷大学の学生さんと広小学校の6年生が「こども梧陵ガイド」が4年目を迎えるとお伝えしました。このように、いろいろの機会をとらえて、こども達が防災を勉強しているのです。広川町では、4年生になると全員が「防災検定」を受けていますが、こうした子どものときからの防災の取組は、将来成人してからも大いに役立つものと思います。

\*\*\*\*\*

## 関西大学・龍谷大学から記事提供

前号で関西大学と龍谷大学の学生さんが広小学校の6年生と「稲むらの火の館」で「こども梧陵ガイド」の事業をしていただくことをお知らせいたしました。今年で4回目になります。こうしたことを皆様に詳しくお知らせするために、今月号から関西大学社会安全学部近藤ゼミナールと龍谷大学政策学部石原ゼミナールの学生さん達が、記事を提供してくれることになりました。第2面に掲載していますのでご覧ください。

## 「第12回稲むらの火講座」開催 !!

稲むらの火講座も今回12回目を迎えます。今回は兵庫県淡路市の「北淡震災記念公園」の総支配人米山正幸先生をお迎えいたします。

「北淡震災記念公園」は平成7年(1995)に起こった阪神淡路大震災(兵庫県南部地震)の被害、断層の状況を保存しています。米山先生は、この地震で大きな隆起をした遺跡を保存している「北淡震災記念公園」の総支配人、野島断層保存館副館長として、震災当時の様子や地域のコミュニケーションの大切さ、命の大切さ、地震に備えることの大切さなどを熱く語られています。



## 第12回稲むらの火講座

演題 「野島断層からのメッセージ

～震災といのち・人とのつながり～

日時 令和元年9月21日(土)午後1時30分

場所 稲むらの火の館3階

定員 90名(申し込み順とします)

電話 0737-64-1760

FAX 0737-64-1761

でお申し込みください。

いつものことですが、講演をお聞きいただくのは無料ですが、その後に館内をご見学いただく場合は有料となります。あらかじめご了承ください。

<関西大学・龍谷大学だより>

### 関西大学 近藤ゼミナール

はじめまして！ 関西大学社会安全学部で災害情報をテーマに活動している近藤ゼミナールです。私たちは、全国各地で防災や復興に関する情報を発信するプロジェクトを展開しています。

障害者や難病患者のための防災、限界集落における防災などにも向き合い、「ぼうさい甲子園」で大学部門・全国ランキング 1 位を受賞しています。これからもどうぞよろしくお祈りします！

### 龍谷大学 石原ゼミナール

こんにちは！ 龍谷大学政策学部で防災をテーマに活動している石原ゼミナールです。週 1 のゼミの時間では、行政が月ごとに発信する防災情報を整理しゼミ内で発表したり、「防災意識とは」や「災害の記憶を 400 年後に伝えるためには」などを論点にして議論したりしています。

また、昨年 2 月には、徳島県阿南市で小学生に防災授業をおこない、土砂災害の怖さや避難所の運営方法についてレクチャーしました。

### こども梧陵ガイドとは？

2016 年 8 月、稲むら火の館に関西の大学生が集まり、「広川町の防災力を高めるために何ができるか」というテーマで話し合いました。その際に出た案の 1 つが「こども梧陵ガイド」です。

これは、小学校時代の防災教育の集大成として、広小 6 年の児童たちが、稲むらの火の館の来館者に防災のクイズを出題してガイドする取り組みです。毎年実施して、防災の担い手（「次世代梧陵さん」）を増やしていきたいと考えています。今年は、バージョンアップした「こども梧陵ガイド」に挑戦します。11 月 16 日（土）、17 日（日）の 2 日間です。ぜひ、お越しください！



### 『安政聞録』 翻訳文 (その6)

原作・古田 詠処 養源寺蔵

津波は七度おこって、夜半過ぎ、まったく静になったので、人々を見回っていた男子も未明からおいおいわが家はどうなっているかと見回りに行き、さっそく盗賊に入られて家財を奪われた家もあった。実に盗賊という輩は、自分が栄達しようとして悪いことをする、これは天の理にもとることであり、次の日にも首を斬られることを知らずにこのような悪い事をしている。さて、このような危急の時に、日ごろは善人と思えていた人も一時の利欲に迷い、むなしく悪心が起こり、あたらしその身を亡ぼすのみならず、父母の名を汚し、あるいはお上(幕府)の施策に頼るものもいた。また常日頃は格別ぱっとしていなかった人も(危難に?)臨み、あれやこれやと思いのほか、真実が現われただけでなく、節をたてて名誉を受けた人もいた。古来、国が乱れた時に現れる忠臣というのは、「家が病んで孝子が出る」というこの道理である。凡人の子たるもの、ただ公正な人物と交わり賢者にあつて正しい事を聞いて見習い、悪い人とは(感情を表に出さず)心の中では遠ざけ、巧言令色な人物に対しては実春之なてし、人となりを見明察しなければならない。だんだん夜が白み、朝を告げる鶏の声などはいつもと違ってか細く聞こえた。もっとも広村の叫び声は、昨日の災難に遭い、手の筋も見える程に無残に死んでいった者もあり、棟や二階に上って免れた者もいた。夜が明けると雀が鳴いていたが、所々から聞こえるのは、人々の嘆き悲しみの声だった。今朝渡れば、みんなは広村の方をみたところ、思った以上に四ヶ所の寺の屋根や並び屋根が見えたので、人々は少し安堵の色を見せた。しかし津波が上ったところには、海底の土砂で田も溝も一面に埋められ道を判別することもできなかったの、老幼女子は歩くことができなかつた。なかには、血気盛んな男子は難を厭わず見回りに帰っていった。田町は被害が一番軽く、西のほう少し、津波は養源寺の前で少々、我が家の前の三軒と西隣一軒が流された。中町は、津波の西方の濁流で三部通り流された。(つづく)

